

# 新見庄での本位田家盛

——続田所と莊園——

牛 尾 浩 臣

はじめに

私は先に「田所と莊園——東寺領播磨国矢野庄田所一族の歴史——」<sup>(1)</sup>で、南北朝以後の矢野庄の田所一族の歴史を追った。本稿はその続編である。矢野庄の田所本位田家盛は、守護方より田所職を闕所にされ、その後、新見庄へ上使（莊園で、年貢・公事の徴収・検断のために現地に派遣される者）として赴き、三四年後、再度矢野庄に帰庄し、莊官へ復歸するという波乱の人生を送った。家盛は莊園領主の東寺の寺僧や関係者でなく、守護の被官でもなく、矢野庄に古くから勢力をもつ本位田一族の者であった。このような家盛が、他の莊園の莊官となるような例はまれなものだと考える。本稿では、家盛の新見庄での活動を追うことを通して室町後期の下級莊官の一例を明らかにしたい。<sup>(2)</sup>

新見庄へ赴任

家盛が父玄舜の跡を継ぎ、矢野庄の田所職に補任されるのは、長祿二年（一四五八）のことである。南北朝期より矢野庄の田所を務める本位田一族の者である。家盛が守護方に名田を闕所にされたいきさつについては、拙稿

「田所と莊園―東寺領播磨国矢野庄田所一族の歴史―」を参照されたい。事件の起こったのは家盛が田所になって二年後の、寛正元年（一四六〇）二月のことであつた。家盛の申状によれば、代官の小者のものになつていた、あちやという家盛の譜代の下女が、小者より暇を出された。そこで、譜代の下女なので、家盛が再び召し使つていると、この下女が逃亡した。他所で二〇日あまりいたのを、召し返しまだ使つていると、守護方より、曲事であるとして、一二月二五日に守護方の使節が入部して、大晦日まで家盛を折檻し、二〇貫文余を責め取られた。その翌年四月一四日に、再び守護の使節が入部し、去年の公事の残りといつて、名田を闕所にしてしまった。<sup>(3)</sup>『相生市史』にも同様の指摘があるが、先稿では、この事件の背景を、名主でもあり、且つ代々の田所として莊園を維持している家盛は、守護方にとって邪魔な存在であり、この事件は、守護方が矢野庄からの家盛の排除をねらつたものであると考えた。事件後、田所職も守護方に没収されたようで、東寺による返還要求も功を奏さなかつた。

この家盛が、新見庄に下向するのは、事件から二年後の寛正四年（一四六三）九月のことである。

#### （前略）

一、上使本位田矢野田所二人主従路錢、可為百五十疋来之由、治定了、<sup>(4)</sup>

#### （後略）

傍線・（ ）は筆者、以下同じ。

この史料は、東寺百合文書の最勝光院方の評定引付の寛正四年九月六日条である。新見庄の管理は、この最勝光院方の寺僧たちの評議によつて運営されていた。最勝光院方は、東寺で行われる年間の法会・祈禱のうち、講堂での仁王経秘法と勸頂院護摩堂での長日護摩を担当していた。この時家盛は、東寺の上使として新見庄に派遣されたのである。矢野庄で名田も田所職も闕所にされた家盛のその後は、恐らく矢野庄を逐電し、つてを頼つて京都で暮らしつつ再起を願ひ、東寺とも何らかの關係をもち続けていたのであろう。矢野庄を離れたこの時でも家盛は依然

「矢野田所」と呼ばれている。家盛の生活は質素なものであったらしく、二日前の九月四日の評定引付には、「新見庄上使事、田所領状申候、但着物等、一向不所持、可如何仕乎之由、託申之由、披露之处、百疋可給之由、衆儀治定畢<sup>⑤</sup>」と、上使として下向するのにふさわしい着物がなく、百疋を特別に給付されていることが記されている。

なぜ家盛が上使に選ばれたのかは不明であるが、緊急に選ばれたことは確かである。というのは、この一〇日ほど前の八月二五日に、有名な代官祐清殺害事件が起きており、九月三日の評定では、「京都、重而、菟角難及其沙汰歟、肝要、先急、可被下上使之由、衆儀治定<sup>⑥</sup>了」と、上使の派遣を決定し、翌四日には、先述のとおり、家盛が上使となることを受け入れている。家盛の上使決定は、一日で決まったのである。

新見庄は、応永一五年（一四〇八）から、備中国守護細川氏の重臣の安富氏が請負代官を務めていた。しかし、寛正二年（一四六二）に、代官安富智安に対する百姓らの排斥運動が起こり、東寺の直務支配を望む百姓らの要求により、寛正三年（一四六二）七月に、祐清が代官に任命されたのである。<sup>⑦</sup>

新見庄では、祐清が殺害され、犯人が逃走したため、それを追った沙汰人や百姓等が、祐清の馬が地頭方の政所に繋がれているという風聞を知ったことから、地頭方政所に発向し、地頭方の政所を焼き払っており、事件は地頭方をまきこんで拡大しつつあった。新見庄の地頭方は、相国寺の禅仏寺領である。家盛は、この事件の解決の任を受けて九月中に下向したようである。家盛自身も、事件の処理の困難さは十分承知の上での下向であったろう。

これまでの研究では、家盛の地位については、代官、あるいは上使・代官両方の役割を負って派遣されたと考えられてきたようであり、やや混乱が見られるが、派遣の時点では、家盛は上使であって決して代官ではない。家盛が代官になる経緯については、後に述べることにする。

## 新見庄での事件処理

家盛の新見庄からの最初の報告は、一〇月二二日付で二通送られ、十一月三日に東寺に着いている。一通は、殺害された祐清の遺品のリストの注文で、新見庄の田所金子衡氏・惣追捕使福本政盛吉・公文宮田家高（この三人は三職と呼ばれる）・そして本位田家盛の順で連署して東寺の公文所宛になっている。<sup>⑩</sup>もう一通の内容は、「当庄之御帳、そのほか未進帳」「夏麦之事」「公事昏之事」「先代官さんやうしやうの事」など、年貢関係の文書の点検と事務について順調に進んでいること、そして、祐清の葬儀や中陰については三職がとりおこない、「ここちよくそのせいはいお、いたされ候間、いよいよごほうびあるへく候」と、三職の働きを称賛し報告している。この時点で、家盛にとつて問題となつたのは、祐清が殺害されたとき、百姓から借りていた太刀と、惣追捕使福本から借りた鞍が奪われ失われてしまった件だけであつた。<sup>⑪</sup>

ところが、京都では、百姓らが焼き払つた地頭方政所の補償問題が浮上してくる。評定引付の九月一三日条には、地頭職をもっている相国寺鹿苑院内の蔭涼軒の季瓊真薬が地頭方政所を焼き払つたことに対し抗議に東寺を訪れ、失われた政所の雑具を返却するように申し入れてきたことが、<sup>⑫</sup>そして、引付の一〇月五日・八日条に、真薬がこの事件を幕府に訴え、將軍足利義政より、領家方が政所の新築と雑具を返却するとの裁定を得、東寺も仕方なくその裁定を了承したことが記されている。<sup>⑬</sup>

一〇月二六日付の家盛からの注進状によると、新見庄の家盛のもとには相国寺からの上使が一〇月二三日に来て、この経過を伝えた。家盛にとつても不満が残る裁定であつたようだが、家盛は、「彼政所家をつくり候へと、三職又ハ百姓へ申付」けた。すると、三職は、

（前略）

寺家様之御大事になり候ハ、めんほくなく候へ共、ともかくもの心中にて候、御百性等は祐清之いきかゑられ候おもひにて、よこみ・谷内にせいかいをさせられ候共、政所家之事者、つくり申まじきよし、よりあいを仕ふつと申きり候間、たとゑ京とに御りやうしやう候共、いかゞつくり候へきや、かたく承候ハ、ちくてん可仕候よし申候て、日々に、より合を仕候、此ゆわれハ、当庄之事ハ、地頭・両家、入くミの事にて候、あさゆうより、あい候中ハにて候か、此方よりやき、又此方よりこはし候を、かたきつくり候はん事、まつ大までのちしよくにて候<sup>14</sup>

(後略)

と、百姓等は、祐清之殺害犯である横見・谷内が殺されても政所の新築は絶対しないことを寄合で誓い合い、たとえ東寺が了承しても絶対つくらない。無理にも強制されるなら逐電すると日々寄合をしていること、またその理由を、新見庄は、地頭方と領家方の土地が入り組み、領家方の百姓と地頭方の百姓とは朝夕に会う内輪なのに、自分たちで焼き、壊した政所を作ることは、末代までの恥辱と考えていることを伝え、政所の新築は、一筋縄では百姓等の納得が得られない旨を家盛に返答したのであつた。

この状況に対し、家盛は、「御年貢之時分、御百性等ちやうさん仕候てハ、しかるへからす候、(中略)きつと御上使を御下候て、地下をもやわられ候て、彼政所家をも、御つくらせらるへく候哉、我らかてちやく二不及候、何としても京都にて御道やり候へかし<sup>15</sup>」と、百姓等の逃散を危惧し、新たな上使の下向による百姓等の説得と、自分たちの手酌に及ばない(手に余る意味か)問題なので、何としても東寺の方で話をつけてもらいたいと、二つの旨を要請した。

家盛の要請を受け一月四日には、上使増祐・乗円が新見庄に到着し、家盛とともに問題の解決に臨むこととなつた。この間にも家盛は、政所新築の件以外に、年貢の催促と運送、公事紙の運上、夫錢の進上、宮田家高の公文

職補任料、福本盛吉の惣追捕使補任料の件などで奔走している<sup>16</sup>。

家盛や三職の説得が効果をあらわしたのか、一二月になって、百姓等はやつと政所の新築を渋々承知したようである。しかし、一二月八日に相国寺力者（公家・寺社・武家に仕えた力役奉仕者、剃髪しているが僧侶ではない。駕輿、馬の口取り、警固、使者などをつとめる。）<sup>17</sup>と、地頭方政所屋の者が、幕府から相国寺に遣わされた折紙を持って家盛らの所にやつてきた。その折紙の内容は、地頭方政所から奪われたとされる家財道具などの雑具の返却についてのものであった<sup>18</sup>。この件に関し、家盛らは、三職と相談して返却を百姓等に申し付けた。しかし、百姓等は、「白中二火を懸候て焼失候上者、何を取可敷候哉、言語道断之次第に候、其上起請文なんと沙汰可仕事、不思寄事にて候<sup>19</sup>」と、白昼に火を懸け政所を焼いてしまったのに、家財道具を取るはずがない。その上起請文を書けとは思ふべきこととしか言いがたいと強く反発し、三職、百姓とも、「家を御造候て御返し候事さへ、末代口惜事に候処二、又か様之子細被仰下候、地頭領家入くミの事にて候処二、此後者何として地頭方之人二面をもむけ候へき哉<sup>20</sup>」と、政所を新造して返すことさえ末代まで口惜しきことなのに、また、家財道具の返却など申されては、地頭方の者に顔向けできないと、その不満を家盛や増祐にぶつける始末であった。この時家盛らは、使いの力者や政所屋の者に、酒をふるまい、「家并雑具等之事、可然様二申付候へとて、我らを被下置候間、更々等閑不存候、乍去、先政所屋大儀之事に候間、新造仕候て後、涯分糺明仕候て、返申へきよし<sup>21</sup>」返答して、使いを帰し、「当年中二一造立へき由、相国寺上使二申定候間、可然古屋を相尋候時分にて候<sup>22</sup>」と、今年中に政所屋を作ると相国寺の上使に返事をしたので、政所屋に適当な古屋を探しているところであると東寺に報告している。

## 政所の新築

つづいて、政所の新築に関する家盛・増祐の注進状にもとづいて政所の新築の過程を追ってみよう。次は、寛正

五年（一四六四）三月二一日付のものである。

（前略）

一、地頭方政所屋之事、本屋先一新造仕候て、不日ニ注進可申旨、被仰下候、則可取立候処ニ、正月十四日相国寺より、被申下候子細者、上意之御事ニ候間、古屋之事者、不可叶由、堅申され候、悉新敷材木にて、造立候へと申され候て、堅催促候間、古屋にて候へ共、御注進勘用にて候、平ニ此屋を立させられ候へと、種々にわひ事仕候間、庄主申され候子細ハ、是にて、是非之返事ニ不及候、色々承候間、注進可申候とて、正月廿八日態納所をのほせられ候、其返事ニより候て、取立られ候へと申され候間、寺家之御書下之後、又相国寺之返事を相待申候、

一、相国寺之御返事、二月十八日当来候、其子細者、去年十月より、為上意、堅被仰候処ニ、いまニ至、古屋なんと可取立候由、御注進候と、西堂ニ申候者、不可然候由、同宿あまた談合候て、被申下候子細者、とても庄主御渡候上者、領家方上使と談合候て、早々取立、注進候へと、内々申下され候、此上者、古屋にて候共、如元候者、御取立候へと、同日以使者、申送られ候、其後、三職并御百姓中へ相ふれ候て、地を引、作事を仕候、

一、本屋之事、元之石候間、彼屋ミしかく候所をハ、つき候て、如元取立候、仍破風・狐戸・面々垂木・木舞以下、新敷仕候、

一、今月十七日ニ屋祢をふき立候、其時者、地頭方百姓中も、各罷出候、さ候間、自然之事も出来候者、又一大事と存候て、色々斟酌仕候へ共、領家方御大儀と申候て、各罷出候、庄主も自然之事をハ、堅申付候と、申され候間、不及力、其分にて候、両方三百余人、罷出候間、十七日申刻ニ、屋祢をふきおろし候、乍去、無為ニ罷帰候間、寺家之御ため、又我ら一身之大慶、此事に候、萱も七千束計入候、

## (中略)

一、去年進之候指図、入ましく候、本屋之石候間、如元、新造候由、可被仰候、指図之是非ハ、入るましく候、同本屋之請取を、庄主ニ申候へハ、内作候ハぬとて、不出候、不及力候、

一、台所之事、早々柱立仕候へと申候へ共、本屋先とゝのへ候と、申延候、

一、台所新造候へと、被仰候者、三職・地下人も、罷出候ましきよし申候、末代之恥辱ニ候へ共、自寺家、堅蒙仰候間、本屋之時者、罷出奉公申候、以後者、罷出候ましき由、内々治定候、御沙汰あるへく候、既本屋一、立候上者、此分にて可然様ニ、御落居候ハ、可畏入候、

## (後略)

家盛らは、一二月中に何とか政所の新造に取り掛かりたいと考え、解体移築できる適当な古屋を探していたのであったが、年があらたまり寛正五年正月一四日に、相国寺から「上意之御事ニ候間、古屋之事者、不可叶由、堅申され候、悉新敷材木にて、造立候へ」と、幕府の命令であるので、古屋の移築ではだめだ、新しい材木で新築せよと、また、難題が突き付けられた。家盛らは、相国寺側の庄主（禪宗寺院で、地方の寺領莊園を管理する莊官）に「種々にわび事」をして、古屋の移築の許可を相国寺へ注進してもらった。その返事の内容は、「去年の一〇月に幕府の命令で新造が決定しているのに、今に至り、古屋を解体して建築すると注進してきたなどと、西堂（季瓊真薬）に伝える訳にはいかなないので、同宿（同じ寺坊に住み、共に師について学ぶ僧侶）のものの多数で相談し、庄主にまかしているのだから、庄主と領家方上使の家盛らが相談して早々に建築して注進せよ」と「内々申下され」たものだった。そこで庄主から、「この上は、古屋でもとどおりにできるならば、建てられればよい」と、使者をもつて伝えて来た。家盛らは、その後、三職・百姓らに命令して作事を始めた。

焼失した政所屋の柱の礎石が残っていたのでそれを参考に建築を始め、古屋の長さが短くて足りないところは、



継ぎ足して元のごとく建築した。そのため、「破風・狐戸・面々垂木・木舞」以下、継ぎ足したところは新しい材木で作った。柱の礎石を参考に建築したので、去年東寺に送った政所の指図は必要ないと断っている。

三月一七日の屋根を葺く時には、「領家方の百姓だけでは大変だといって、地頭方の百姓も手伝いにやって来た。また争いが起こつては「一大事」だと家盛らは心配したが、両方合わせて三百人余りが作業し、申刻（午後三時から五時）に完了した。使用した萱は七千束であった。無事に終わつたことを喜ぶ家盛らの「寺家の御ため、又我ら一身の大慶、此事に候」という言葉に、彼らの安堵の気持ちがよく表れている。また、領家方・地頭方と別れて対立する意識を持っている百姓らが、このような大きな作業では互いに助け合うという共同体の習慣があつたことが窺える。家盛らは、その後、政所屋の受取を求めたが、庄主は内作が完成するまではと言つて受け取りにはこなかつた。

まだまだ難題は続く。政所の本屋が完成すると、今度は台所の新造が要求されてくる。これには家盛らも困り果て、台所の新造を要求されても、三職以下百姓たちは、末代の恥辱だといつていたのを東寺より強く命令したので本屋の時は奉公をしたが、これ以後は一切しないことを内々取り決めている。本屋を建てたのだから、これで解決してくればありがたいと、東寺に解決を願っている。

次は、六月三日付の家盛・増祐の注進状である。

被仰下条々、三職并地下人等二堅申付候処ニ、以前注進如申入候、本屋之時者、致奉公候、台所之事ハ中々存知申すまじき由、度々返事を仕候、其子細者、先代官を打候横見・谷内兩人、地頭方ニかゝるおかれ候、乍去谷内か家をハ去年十二月ニこほちのけられ候、いま一人の横見ハ我が家ニ其まゝ候、此兩人ニ腹を切らせられ候ハ、台所なんと罷出、可致奉公候、か様之者をさへ、地頭方にハかゝるをかれ候、なとや是ほと御事をハ、為寺家、公方様へも御申候て、事無為ニ御さたなく候哉と、各申候を、色々寺家之御大事にて御座候由

申候て、三職地下人ニわひ事仕候間、金子か百姓河毛と申在所之家を、二間買候て、今月二日こほち候<sup>(25)</sup>、

(後略)

三職以下百姓たちが台所の新造に反対している理由は、「代官祐清を殺害した横見と谷内両人は、まだ地頭方にかくまわれている。谷内の家は去年の一二月に解体したが、もう一人の横見は自分の家に住んだままである。この二人に腹を切られれば台所の新造に奉公するが、今のままではできない。犯人が地頭方にかくまわれていることを東寺は、幕府に訴えるべきである」という、当然のものであった。家盛らは、三職や百姓に東寺の大事であることを詫び事して、やっと田所金子衡氏の百姓河毛の家を六月二日に二間買つて解体し、「地頭方政所屋へもたせ候<sup>(26)</sup>て、六月六日に「柱立仕候<sup>(27)</sup>て、二六日「屋根以下ふきおろし<sup>(28)</sup>」、やつとこのことで台所の新造にこぎつけている。

この六月の時点では、「地頭方政所屋内作之事、急束ニ可致其沙汰候処ニ、多治部と申在所へ板をあつらへ候、其板遅く候、又地頭方大工指合之子細候、さ様之事ニより候て遅々候<sup>(29)</sup>」と、内作の板が遅く、また、地頭方の大工の都合がつかずに、政所屋の内作が遅れていることが報告されている。七月になつても「本屋内作之事、大略致其沙汰候、乍去、三間之分未板なく候て、沙汰不仕候<sup>(30)</sup>」と、完成には至っていない。政所の建物がごとく完成したのは、八月であつた。

残る問題は、政所から奪われたとして返却を要求されている家具などの雑具についてである。次は、先掲の六月三日付の注進状の続きである。

(前略)

次失物之事、涯分致糺明候へ共、不事行候、乍去、別人を御下候て、可有御糺明候哉、我らハ何共無了簡候、本屋内作、又台所取立候者、ふと可罷上候、是に候ても、毎日に失物等之事、地頭方より催促仕候、さ様之返

事も一大事に候、去年霜月よりいまに、同事を色々申延候て、かんにん仕候へ共、是以後者、何共返事可仕様もなく候、又彼方庄主申され候ハ、失物無出理候者、代物なんとにても御沙汰あるへく候哉、内々代をさし候へハ、六十貫文余ニ相当候、御無沙汰候者、代を御請取候へ之由、相国寺へ注進申候、心得候へ之由、庄主申され候、其注進今月一日二のほり候、為御心得之、申入候、

(後略)

家盛も増祐も、雑具などの失物については、以前より何の進展もなく、この件の担当は、他の者を下向させて糺明に当たらせてほしいこと。また、庄主の方から失物が返却できないなら代物弁済でもよい。その額は六〇貫文余である。返却できないなら代を請け取るように相国寺に注進したと言われたことを報告している。この後、失物の返却が行われたかどうかを示す史料は見当たらず、このままうやむやになったのか、あるいは東寺が相国寺に金銭で弁済して決着がつけられたかはつきりとはしない。

ともかく家盛としては、幕府の力を借りて圧力をかけてくる相国寺方に対して、東寺もあまりあてにならず、三職・百姓等を説得して政所を再建し、ことを穏便に済ます以外打つ手がなかったのである。しかしながら、このような困難の中で、事件から一年でこの難問を解決した家盛の手腕は、見事なものだったといえよう。

## 反銭の賦課

台所の屋根葺きを翌日にひかえた六月二五日、守護方より大勢の守護使が入部し、御讓位反銭の催促のため、七月二一日までの二六日間居座り続けた。この年、後花園天皇が退位して後土御門天皇が即位し、幕府が讓位段銭を諸国の莊園・公領に課したのである。この時の備中国守護は、細川勝久である。百姓たちは談合し、「就為守護不入之在所、先々更々か様之無催促、急而守護之使おい可立之由」<sup>③</sup>を定め、守護使を追ひ払おうとした。これに対し

て、家盛や増祐・三職らが「色々申候て」<sup>(33)</sup>百姓らを思い止どまらせた。家盛と三職は、守護使の食費など庄中の費用を負担しあい、最後に、家盛が一貫文の太刀を、三職が五〇〇文を支払って守護使を引き上げさせることに成功した。家盛・三職が負担した全費用は七貫六〇〇文にのぼった。<sup>(34)</sup>一方東寺の方では反銭免除の奉書獲得に成功したが、その費用の一献料二〇貫文を新見庄の百姓の負担と決め、家盛に徴収を申し付けてきた。<sup>(35)</sup>二〇貫文の内一〇貫文は徴収され、一〇月二二日に送られたが、残りについては徴収することができず、十一月二四日付けの注進状で家盛は、「反銭之事、仰下され候、先度も御上使相共ニ、かたく御百姓中へ申付候へ共、先拾貫文之分進上申候、力不及候」<sup>(37)</sup>と、中々徴収が困難な状況を報告している。この件につき、三職と百姓たちは寄合を開き、その結果を同二四日付の三職注進状で報告している。

(前略)

抑、段銭御一献料之事、仰下され候、御意尤にて候、さ候間、御百姓中へ其分申付候へハ、段銭と申事、更二前々沙汰お申たる事なき事にて候へ共、京都にての御しんろう、政所殿其外御状共ニ候間、拾貫文之分沙汰申候、寺家様之御事ハ、ひろき御事にて御座候へハ、御ふちも候ハ、畏入へきよし申候、乍去、なをなを談合仕候て、今度之夫丸御返事可申由申候、

(中略)

守護使大勢付申候時、御百姓中ハおつ立申候ハんと寄合仕候、さよう二らうせき仕候てハ、寺家御為、地下の為、一大事と存候て、政所殿我ら三人として、十七日まであいしらい申候、其外度々守護代へ人を出候路銭と申、又しゆんつけ礼銭と申、又使二わひ事仕候て、立候し時、日別使銭と申候て、大儀ニ申候しお、我ら三人度々罷出候て、かたくわひ事を仕、太刀礼銭共出候て、立申候し、是おハ政所殿、我ら三人ニ御ふち候ハてハ、いかゝにて候、其時も公文殿之水はなおハ、あいしらい申へく候、以後ハ御年貢ニ御立候ハてハと申候つる、

委細は公文殿御存知の御事にて候、御立用候ハ、畏入へく候、諸事今度之夫丸ニ申上へく候、恐惶謹言、<sup>38)</sup>

(後略)

これが、東寺の公文所宛の三職の注進状である。三職・百姓等の談合では、反銭については前々から負担したことはなかったが、東寺の心労もわかるので、一〇貫文は負担した。残りは広い心で許してほしいというものである。続いて三職たちは、守護使の在庄中に彼らがさまざまな負担した分を年貢から立て替えてほしいと願っている。これに対し東寺は、一二月九日付の家盛への書下で、「段銭沙汰用途残拾貫文事、于今無沙汰之条、不可然候、三職相共ニ堅御催促候て、年内必々可被進候、更々不可有無沙汰候<sup>39)</sup>」と、残る一〇貫文を年内に必ず収めるように強く命じている。また、守護使の費用については、「段銭使入足事、是ハ御百姓中より可沙汰候条、勿論ニ候哉、雖然、京都入足可進之間、不被仰付候、仍御年貢内にて可有立用候、但地下よりの沙汰用途、残拾貫文之分無沙汰候者、此事可有御変改候、仍堅御催促候て、可被進之候、返々不可有無沙汰候<sup>40)</sup>」と、守護使の費用は、年貢から立て替えてもよいが、残る一〇貫文が納入されないなら、立て替えは許されないと、三職らに交換条件を付けている。結局翌年になってもこの一〇貫文は納入されず、そのままになったようである。

代官家盛

家盛は、政所屋が完成し、反銭の問題が持ち上がった寛正五年の夏に、地下代官に補任された。祐清と同じ補任条件なら、年貢二〇〇貫文の請負代官であった。家盛にとつて、希望の職だったのか、はたまた夢にも思わなかった代官職だったのか、ともかく大出世には違いなかった。八月十二日の反銭の一献料二〇貫文の請文に「国御代官<sup>41)</sup>」と名乗っており、先の十一月の三職の注進状では、「政所殿<sup>42)</sup>」と、呼ばれていることが、家盛の代官就任を示している。家盛は、増祐の注進状によると守護使入部の件に関して報告するために七月中旬に上洛している。<sup>43)</sup>

そらくこの時に、代官に補任されたのだと推測される。先にも述べたが、家盛については、下向した時から代官であつたと考えられてきたが、代官に任命されるのはこの七月の時点である。前代官祐清が殺害されてから約一年、政所屋もほぼ完成し、上使としての役割を無事終えた家盛は、その手腕を評価され、新見庄の地下代官に補任されたのであろう。また、家盛が代官に補任されたもう一つの理由は、この時期守護方の細川右馬守持賢が、新見庄の代官職を望んでおり、東寺は、新見庄の直務支配を維持するためにも独自の代官が必要であり、家盛を代官に補任したのであろう。矢野庄を逐電してから三年、この時家盛は、予想以上の出世をつかんだのである。

家盛は、この年の一月に、去年まで上使給として得ていた年貢一〇分の一の得分を五分の一に引き上げてほしいと東寺に要求している。<sup>(45)</sup> 祐清の代官得分が五分の一であつたので、これは、代官としての徳分を要求したものであろう。地下代官として、家盛の前途が開けてきたかに見えたが、そうはいかなかった。<sup>(46)</sup> 翌寛正六年（一四六五）七月、家盛は、東寺より、新見庄の代官として請人を立てることを要求される。正式な代官には、身元保証人としての請人が必要なのであるが、家盛は、請人なしで任命されたく、この時になつて、改めて請人を立てることを要求したのである。実は、祐清も一年限りの臨時の代官として下向していたのであり、家盛の代官補任も同様に緊急を要する一年限りのものであつたらしい。もと矢野庄の田所であつた家盛には、京都では彼を援助する有力な人脈がなかつたようで、家盛は請人を立てることができなかった。結果家盛は、代官職を召し放たれ、新しい代官には乗観が任命された。<sup>(47)</sup> この後、家盛は新見庄の史料から姿を消す。恐らく、京都に戻つたのであろう。矢野庄を追われ、新見庄で荘官復帰をいったんつかんだ家盛であつたが、その道も再び閉ざされたのである。

### その後の家盛

最後に、その後の家盛の活動を追うことでまとめにかえたい。

新見庄から姿を消した家盛が、東寺の史料に再び姿を現すのは、三三年後の明応七年（一四九八）のことである。『岡山県史』には、家盛の書状として次の史料が載せられている。

（前略）

御公用銭年内拾貫文御使渡申候、只今拾貫文致寺納候、両度式拾貫文之御請取、慥下可給候、相残分則上可申候、地下之躰、無力仕候間、于今延引事、私非無沙汰候、於以後者、如之儀有間敷候、旧冬者、御使御下向之時、万取乱子細候て、不及巨細候、口惜存候、恐惶謹言、<sup>48</sup>

（後略）

これは、三月一四日付で東寺の公文所宛に出されたものである。これが新見庄に関連するものなら、家盛は「年内拾貫文御使渡申候」とあるところら、少なくともこの前年に新見庄の代官に復帰したことを示すものになるが、この書状は、『相生市史』が矢野庄に関連するものとして載せている。次の書状は、矢野庄の請負代官守護代赤松政秀のものである。

（前略）

自東寺参候状、致拜見候、如御存知、去年矢野・高田日損ニ付而、無正躰候、雖然、半分之分、可致進納候由、本位田ニ申付切出候処、依地下無力、延引候哉、堅可申付候、<sup>49</sup>

（後略）

これは、明応七年三月一〇日付のものである。先の家盛の書状は、この守護代赤松政秀の命令で公用銭を半分納めたことに関するものであることがわかる。先稿<sup>50</sup>でも述べたが、この二通の書状から少なくとも前年の明応六年には、家盛は守護代赤松政秀の地下代官として再び矢野庄に復帰していたことがわかる。東寺の荘官から守護の代官への転身である。矢野庄を追われて三十六年が過ぎていた。

新見庄を去り、矢野庄の地下代官として復帰するまでの三二年間の家盛の足跡は全く分らない。他の荘園の下級荘官として働いていたのか、京都で暮らしながら矢野庄への復帰の機会をうかがっていたのであろうか。ともかく、応仁の乱の混乱期を生き抜き、家盛は、故郷の矢野庄に戻って来たのである。すでにかなりの高齢に達していたことであらう。家盛は、矢野庄で代官を、文龜元年（一五〇一）まで務め、家盛の息子と考えられる家延に代官を譲り史料からは姿を消す。恐らく天寿を全うしたのであろう。

新見庄を去った後の三二年間の家盛の活動が分らないのは残念であるが、はじめにでも述べたとおり、矢野庄の田所であつた家盛が、新見庄の代官になるというような例は、まれなものだつたと思う。しかし、家盛が、新見庄の上使に選ばれたのは、彼の田所としての手腕を買われたからであり、そこには、武力はもたないが、荘園管理の専門家としての家盛の姿がある。それだからこそ、家盛は代官にまで昇進できたのである。また、家盛の荘官としての専門能力が、今度は守護代の代官として、再び彼を矢野庄に復帰させたのである。

註

- (1) 拙稿「田所と荘園―東寺領播磨国矢野庄田所一族の歴史―」（『鷹陵史学』第二五号・一九九九年）
- (2) 矢野庄については、『相生市史』第一・二巻（本文編）第七・八上・下巻（史料編）、新見庄については、『岡山県史』第五卷中世Ⅱ・第二十卷家わけ史料が詳しい。
- (3) 田所本位田家盛申状・『相生市史』第八巻下一〇七二（『東寺百合文書』モ函二〇六・ツ函一三八）
- (4) 寛正四年最勝光院方評定引付九月六日条・『岡山県史』第二十卷家わけ史料八二四（『東寺百合文書』け函一四）
- (5) 寛正四年最勝光院方評定引付九月四日条・『岡山県史』第二十卷家わけ史料八二四（『東寺百合文書』け函一四）
- (6) 寛正四年最勝光院方評定引付九月三日条・『岡山県史』第二十卷家わけ史料八二四（『東寺百合文書』け函一四）
- (7) この経緯は『岡山県史』第五卷中世Ⅱに詳しい。
- (8) 寛正四年最勝光院方評定引付九月三日条・『岡山県史』第二十卷家わけ史料八二四（『東寺百合文書』け函一四）



一四

- (9) 例えば佐藤和彦「中世備中の農民闘争―東寺領新見庄を中心に―」(竹内理三博士古希記念会篇『続莊園制と武家社会』・一九七八年)では、家盛は代官として下向したされている。また、『岡山県史』第五卷中世IIには、家盛は「上使・代官として」(三四三頁)下向したとある。『岡山県史』第二十卷家わけ史料の題名でも、家盛が代官になった後も、上使としているなど混乱がある。
- (10) 新見荘上使本位田家盛并三職連署注進状・『岡山県史』第二十卷家わけ史料三七二(「東寺百合文書」サ函一一六)
- (11) 新見荘上使本位田家盛注進状・『岡山県史』第二十卷家わけ史料三七一(「東寺百合文書」サ函一一五)
- (12) 寛正四年最勝光院方評定引付九月一三日条・『岡山県史』第二十卷家わけ史料八二四(「東寺百合文書」サ函一四)
- (13) 寛正四年最勝光院方評定引付一〇月五・八日条・『岡山県史』第二十卷家わけ史料八二四(「東寺百合文書」サ函一四)
- (14) 本位田家盛注進状・『岡山県史』第二十卷家わけ史料一四四・(「東寺百合文書」ツ函二六二)
- (15) 同(14)
- (16) 新見荘上使本位田家盛注進状・『岡山県史』第二十卷家わけ史料三七七(「東寺百合文書」サ函一二一)
- (17) 『莊園史用語辞典』(東京堂出版) 一九九七年
- (18) 新見荘上使本位田家盛・上総増祐連署注進状・『岡山県史』第二十卷家わけ史料三八五(「東寺百合文書」サ函一三〇)
- (19) 同(18)
- (20) 同(18)
- (21) 同(18)
- (22) 同(18)
- (23) 新見荘上使本位田家盛・上総増祐連署注進状・『岡山県史』第二十卷家わけ史料一一六二(「東寺百合文書」サ函一四九)
- (24) 同(17)
- (25) 新見荘上使本位田家盛・上総増祐連署注進状・『岡山県史』第二十卷家わけ史料三九三(「東寺百合文書」サ函一三八)
- (26) 新見荘上使本位田家盛・上総増祐連署注進状・『岡山県史』第二十卷家わけ史料三九一(「東寺百合文書」サ函一三六)
- (27) 新見荘上使上総増祐注進状・『岡山県史』第二十卷家わけ史料三九六(「東寺百合文書」サ函一四一)
- (28) 同(27)
- (29) 同(26)
- (30) 同(27)
- (31) 同(25)
- (32) 同(27)
- (33) 同(27)

- (34) 新見荘上使本位田家盛并三職連署注進狀・『岡山県史』第二十卷家わけ史料四〇一（『東寺百合文書』サ函一四七）
- (35) 東寺書下案・『岡山県史』第二十卷家わけ史料五九四（『東寺百合文書』サ函三七二）
- (36) 新見荘年貢等送進狀・『岡山県史』第二十卷家わけ史料四〇四（『東寺百合文書』サ函一五一）
- (37) 新見荘上使本位田家盛注進狀・『岡山県史』第二十卷家わけ史料四〇九（『東寺百合文書』サ函一五六）
- (38) 新見荘三職連署注進狀・『岡山県史』第二十卷家わけ史料四一〇（『東寺百合文書』サ函一五七）
- (39) 東寺書下案・『岡山県史』第二十卷家わけ史料四一三（『東寺百合文書』サ函一六〇）
- (40) 同(39)
- (41) 新見荘代官本位田家盛・節岡名太郎兵衛連署請文・『岡山県史』第二十卷家わけ史料九一〇（『東寺百合文書』え函三八）
- (42) 同(38)
- (43) 同(27)
- (44) 寛正五年最勝光院方評定引付二月一五・一七・三月一〇・二九・三〇日条など・『岡山県史』第二十卷家わけ史料八二五（『東寺百合文書』け函一八）
- (45) 同(37)
- (46) 寛正六年最勝光院方評定引付七月三日条・『岡山県史』第二十卷家わけ史料八二六（『東寺百合文書』け函一六）
- (47) 寛正六年最勝光院方評定引付七月一九日条・『岡山県史』第二十卷家わけ史料八二六（『東寺百合文書』け函一八）、講座日本荘園史9中国地方の荘園（吉川弘文館・一九九九年）の竹本豊重「新見荘」で、本位田家盛が寛正六年から応仁元年まで所務職（代官職）だったとされているが、その理由が分からない。
- (48) 家盛書狀・『岡山県史』第二十卷家わけ史料六六一（『東寺百合文書』い函四一）
- (49) 高枕軒赤松性喜書狀・『相生市史』第八卷下一一五五（『東寺百合文書』マ函九九）
- (50) 同(1)